

## 水を求めて

江戸時代の初期は耕地が拡張された時代でした。それまで水利の条件が不利で、干害を受けやすかった土地でも、水源が確保されて米づくりが行われるようになりました。そこには、知識や技術を持つだけでなく、人のために尽くす徳のある人物がいました。今回は、徳島県徳島市の袋井用水と香川県高松市香川町の新池の例をご紹介します。

### ■袋井用水と楠藤吉左衛門（徳島県徳島市）

徳島県の島田村・庄村・蔵本村（現徳島市）は、干害に悩まされていた地域でした。島田村の庄屋・楠藤（なんとう）吉左衛門は、元禄5年（1692）に幅10間、長さ200間の用水堀を掘ることを郡奉行所に願い出ました。農民の協力を得て工事を始めましたが、水源は容易には見つかりませんでした。それでも吉左衛門は地質、伏流水脈についての知識を生かして水源地を探し続け、私財を費やしながらか、元禄12年（1699）に水源地の開削に成功しました。用水は三方が堤に囲まれてちょうど袋の口から水が出る様子から袋井用水と名付けられました。水源地に楠藤吉左衛門頌徳之碑が建立されています。＜参考資料：建設省四国地方建設局徳島工事事務所編「吉野川百年史」（1993年）など＞



### ■新池と矢延平六（香川県高松市香川町）

高松市香川町の浅野地区は高台にあり、水不足に悩まされてきました。高松藩の下級武士・矢延平六は、藩主から新池の築造を命ぜられました。初代高松藩主・松平頼重の時代には406のため池がつけられましたが、そのうち100余りは平六が築いたとされるほど、平六は土木技術に優れた人物でした。平六はため池づくりの経験を生かして、4km程離れた鮎滝で香東川を堰き止め、山があればトンネルを抜き、谷があれば樋橋をつくり、農民とともに水の流れを確かめながら工夫して新池まで水を引いてきました。完成したのは寛文9年（1669）でした。新池を見下ろす高塚山の頂上には矢延平六神社が祀られています。＜参考資料：香川県教育会編「さぬき・人・ここにあり」（2013年）など＞

